
Weak ' Illution

神坂 鬼一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Weak Illusion

【Nコード】

N4458A

【作者名】

神坂 鬼一

【あらすじ】

自分の居場所を掴む少年銀の髪を纏った気高き女。それは出会ったはずの無い二人だった。交わる事の無い二人だった。淡い銀の契約の元に、二人は楔で結ばれる

一話 銀の契約

第一話 銀の雪。銀の泉

銀色の雪があたりを包んでいた。冷たい風が頬を撫でる。

そこには、雪以外に何も無い。あるとすれば、枯れた森だけ。

吐いた息も凍り付き、空で霧散する。

いつもの孤独な夢の情景。既に身体が慣れてしまい、寂しいと言う感情も無い。

冷たい風に当てられながら、ゆったりと意識が引き上げられる。

目の前のディスプレイに、薄く濁った紫の髪と、白い濁りが混じった瞳が映る。

むせ返る様な熱気が教室中を覆っていた。

あるものは下敷きを、あるものはノートを使い、何とかして涼もうとしている。

それを尻目に教壇の前で、メガネをかけたスーツ姿の教師が教科書を呪文の様に読み続ける。

前の授業は陣術。その前は唱術。この次の授業が喚術。今は近代歴史と言ったところか。

陣術は魔術陣の構図を。唱術は詠唱単語や文の意味。喚術は簡単な材料を使つての簡易的な召喚の仕方。歴史は最近の砂海化現象のことや、街を救った「えいゆう様」の事。

違う。俺がやりたいのは、こんな事じゃない。

引き出しの中から、ノートを取り出し開く。授業では習わない、習う筈のない行為な魔術関連の単語や関連事項が書き綴られ、半分

が空いている。

そこに意識を集中させるように、ペンを握り白いページに走らせる。

それでも尚、教師の口からは、聞きたくも無い単語や説明ばかりが溢れ出ている。

大切な人を切り捨ててまで、この大陸を護った男や、自らの命を削って魔物を討った男の話。

それと平衡して動く、ディスプレイの中の文字羅列。

くだらない。他人事の様に聞き流し、窓に流れる雲を目で追う。

教師の肩が、微かに震えるのが分かった。今日は随分、長く持ったほうだろう。

「イナミ君。今まで、話した事を簡潔に纏めて、言ってみなさい」
教室の所々でクスクスと笑い声が聞こえ、目の前に教師の顔が現れた。

溜息を吐き、椅子から立ち上がる。今まで、ペンを走らせていたノートを机に置き、一呼吸。

教室に居る生徒は勿論、鳥の羽ばたく音も、外を走る車の音も完全に掻き消える。

「三大偉人と呼ばれる。すなわち、鹿糠羽^{かぬかわ}シユウ。セラフ^二エステ
イード……もう一人は名前不明。鹿糠羽さんは自分の命を削り、大陸に降りた十万の異獣を殺した。セラフさんは大切なパートナーを失ってまで、国を守り抜いた。

砂海現象とは、二酸化炭素増加による温暖化で、海だった場所の半分が砂漠に変わり、そこで生きることの出来ない筈の生物が、ゆつくりと進化をし続け、灼熱の砂地獄でも生きる術を得た。そして…… ああ、すいません。ここは次の所でした」

沈黙。

寝めもしなければ、怒りもしない。ただ沈黙し、彼らはチャイムの音と共に肩を落とし、散らばった砂のように、好き勝手に休み時間を使い始める。

別のクラスの噂話や、弱そうな生徒を捕まえ、財布を盗んだり、黒板に人の悪口を書いていたり、それを消す者も居たり。

それを尻目に、机の横に掛かっていた鞆を掴み、背負う。

誰も咎めようとはしない、見ていても見ているだけ。そんな、妙な視線を受けながら、教室を後にし、出た廊下を右へ進む。

途中、箒を振り回して遊ぶ男子や、それを咎める委員長らしき女子とも、擦れ違ったが咎められる事は無く、とうとう足は渡り廊下へ、そして旧校舎の中へと滑り込んでしまった。

懐かしいような、初めてのような、変な感じのする匂いが漂っている。

臭いわけでもキツイ香りでもないが、無臭では無い。在るはずの、何かの匂い。

「積もりゆく白銀の雪の如く 汝に尽くそう」

不意に口から、聞きなれた言葉が発せられる。

「銀の矢を番えし獣の如く 汝の四肢と成り」

それは、ずっと昔から知っていた詩。母親の中に居た時から聞いていた詩。

「例え四肢が & a m p ; # 2 5 4 4 5 ; がれようと 銀の杭で彼の者を穿つ」

聞きなれていた、謳い慣れていた音が喉から零れ出て行く。

「悠久の時を刻み 銀の時計は謳う」

いつの間にか、暗闇だった空間を自然と足が進んでいた。

そして、腕が浮き上がる。冷たい筒状の物に触れた。手前に引く。

「銀色の時間を越え 此処に願おう」

全て詠み終えた。何も起こらない、起こりはしない。

何故なら、自分には血が無いのだから。純粹な魔力が流れている筈の血が、無い。

目の前に広がっていたのは、本の山だった。乱雑に積まれ、手入れのされていない辞書や、教科書。それから、小説の類や古い術書……それを手にとり広げる。

本校舎にあるものとは違う、全く別の高位術式から、まだ解読さえされてないはずの、最高位術式の翻訳文書。いつも以上に胸が躍り、ノートを広げ書き写していく。

覚える事に意味の無い術式を。いくつも、いくつも。

全てを写し終えた時には、既に外が紫の闇に覆われていた。

予備に持っていたはずの二十冊のノートが、黒く埋め尽くされ、自分の周りに散らばっている。

これで、全部か。

既に興味の無くなった、『空の箱』の中で溜息を吐き、ノートをかき集めたあと、痺れている足で何とか立ち上がり、再び誰も居ない筈の教室の方へと戻る。

誰も居ない。それが当たり前の教室の真ん中で、俺は口を歪め笑った。

銀の詠唱をした日は、何故か一人で居たくなる。そして、思い出す。

壊す魔術ではなく、癒す魔術でもなく、ただ救うだけの魔術を目の前で見せた赤髪の男。

姉が殺された日に、何の利を求める事も無く、救おうともせず見せた銀色の魔術。

男は微笑み、姉の墓を作り去っていった。

まだ、あの時の詠唱が見つからない。それが無ければ意味が無い。今日、書き写してきた高位術式ですら、なんの意味を持たない。

俺は再び、空の箱から抜け出した。

数少ない、茜色のネオンが顔を照らしている。

まだ、夜は深けていないというのに、人の気配も動物の声も無く、夜光虫だけが身体のまわりに纏わり付き、それを払う手が空を切り、音を立てる。それだけの帰り道。

街灯の光も、少しずつ消えていき暗闇だけが……いや、ぼんやりとした光が靄のように身体の周りを覆い、包んでいた。軟らかな声が聞こえ、振り向く。

肩の辺りで茶色の髪を纏めた、おそらく同じ年頃の女の子。

だが、身に纏っているものは、制服ではなく男物のジャケットとジーンズ。

こんな夜でも、茹だる様な暑さを感じるというのに、彼女の服装は初冬に着るような服装で、道路の真ん中で闇に蠢く大きな塊と対峙していた。

体中の神経が警鐘を鳴らす。アレは危ない　放って置いてはいけない。

早く彼女を助けなければ。

殺さなくては

あれは居てはいけない。あれは生きていてはいけない。

殺さなくては

血が滾り、心臓の鼓動が早まる。視界が狭くなり、二つの影だけが脳に映る。

考えるより先に、足が動いていた。石が転がり、音を立てる。

黒い獣の黄色い目がこちらを向く。来い、来い、今なら殺せる。確信した。

ノートに書きとめていた幾つかの術式のうち、一つを頭に描く。

そして、脳内の引き出しを開き、文字の羅列の展開。もう、何度も読んで完璧に頭に叩き込んである。

完全に勝ったつもりでいた、つもりでいた。

「青を帯びし色彩　高き理想を駆けよ　紫の槍」

だが、何も放たれる事無く、虚しく右腕が空を切るだけだった。

黒い獣の牙が、胸に打ち付けられる。鈍い音と共に、口から空気の塊が漏れ、調律の出来ていない笛のような音が鳴る。胸が痛い、喉の奥から鉄の味を含んだ液体が込み上がってくる。

死ぬ。間違いなく、自分は死ぬだろう。だが、それも良い。今ま

での空ろな日常から逃げれるのだから、それで構わないのかもしれない。

否、まだ死ねない。死にたくない。生きたい！

黒い獣の腕を掴む。毛で覆われた丸太の様な感触が手を伝い、背筋へ届く。

添えた手は、獣の狂行を助長するように、自らの身体に押し込んでいるような形となっている。

目の前に獣の顔が現れた。虎でもサルでもなく、あえて言うなら老人の顔。

その老人の顔をした黒い獣が赤い口を開け、肥え溜めのような異臭を放つ涎を地面に垂らし、ネコがのどを鳴らすように、ごろりという音と共に迫ってきた。

死んだ。

「そっち行っちゃダメでしょ」

その獣は息絶えていた。あの少女の手で、一本のナイフにより、後頭部を貫かれ。

獣の額から、突き出たナイフの切っ先から血が滴り、その紅い水滴が顔の上に落ち、弾ける。あの涎と同じ、異臭を放つ血が頬を伝い顎の先へと。

気持ち悪い、息苦しい……息が出来ない。せつかく、助かったと思っただのに。

「ねえ」

想像より、少し低い声色が耳に届き、脳に直接響く。

「君、死にたくないの？ なら」

目の前の少女が、右腕を顔の前へと伸ばす。心地良い、花の香りがする。

「こっちへ来なよ」

いつの間にか、無意識に彼女の手を握ったまま意識が落ちていった。

それは、いつもと違う目覚め。両親からの愚痴を零す声もなく、ただコーヒーの香ばしい匂いが上から漂ってくる。それに続き、木の香りが。

まだ上がりきらない瞼を擦り、天井を見上げる。大きな換気扇がゆつたりと回り、湯気が吸い込まれていく。顔を横に向けると、そこには丁寧に並べられた椅子が何列も並んでいる。

身体を上げようとするが、右胸が軋んで力なく、その場に倒れこんだ。

昨日の出来事は、夢でない事を改めて実感する。

「お、生きかえったみたいやね」

やけに明るい声が入から響き、頭の中を振るわせた。あの少女の優しく響く声とは全く別の質の声であり、成人した男の声を少し高くしたような声音だった。

「コーヒーでも飲んでくか？ 喉渇いとるやろ。ちつとは目覚めるかも知れんよ」

その声の主が顔を覗かせた。

思ったとおり、少し痩身の男。頭は鮮やかな黄色で、耳にはピアス。ワイシャツにエプロンとゆつたりとした綿パンツ。

エプロン以外は、典型的な不良の男の格好だった。だが、悪い風では無い。

どちらかと言うと、身内以上に身内な感じの……とにかく不思議な雰囲気を持っていた。

三日月の形に歪められた口が近づき、手にコーヒークップを渡される。

黒曜石のような色をした液体は、幾つかの波紋を浮かべて水平に止まる。

しばらく、色を見た後でコーヒークップに口を付けた。苦く、薄い味が口の中に広がり、覚醒しきれていなかった意識が、一気に引き上げられる。

中学までは、苦いものは嫌いだった。高校に入ってから、一度も口をつけた事はなかった。だが、今の自分は拒むことなく苦味のあるコーヒーを喉に通している。

周りを見てみると、どうも汚い箇所が目立ち、蜘蛛の巣があちこちに出来ている。

「美味しいやろ？ そやろ。なんなら、甘物とかどうや？」

そう言つて、彼は冷蔵庫からアイスを取り出し、丸くドーム状にくり貫いたのを二つ皿の上に置き、薄いクッキー菓子を添え、目の前に置いた。

甘い蜂蜜の匂いが鼻に届く。

そう言えば、昨日の夜は何も食べていなかったな。

その言葉に甘えるように、皿の上に置かれたスプーンを使い、アイスを崩して、一口ずつ食べていく。

全て食べ終わろうとした時、後からあの声が聞こえた。

「あ、巢に掛かっちゃったか。もう少し、早く帰って来るべきだったかな」

あーあ。という声が、明るすぎる笑顔と共に零れ、それと同時に店のマスターであろう、あの男の明るい陽気な笑みが一変し、邪気たつぷりの笑みへと変化した。

「コーヒー代とアイス代。しめて八百二十円なり」

「高いっ！」

「世の中、そんな甘くないよ？ はい、お会計」

仕方ないか、野良犬に手を噛まれたと思って、八百円くらい

……

ポケットを探す。シャツの中を探す。ズボンの中を探す。無い、無い、無い！

やられた。

さっきまで気絶していて、無防備のまま目を瞑って眠っていたのだ。

財布とられる隙なんて十二分にあるし、こういう時世なのだから、

隙を見せた方が悪い。

肩を落とし、両手を挙げる。もう、煮るなり焼くなり好きにしろ。
「ふふーん。金が無いのに、ただ食いはあかんよなあ？」

後で彼女が軽く笑っている。

「分かったよ！ なにやれば良いんですか、その汚い皿洗いですか。それとも、この誰も来そうに無い店内のリフォームですか？」
完全に開き直った。もう何を頼まれても笑って頷ける。

「そんじゃ、異獣退治行こか」

ああ、やっぱり、食い逃げとかして見るのも良いかもしれない。
い。

走った。全力で走った。あの扉の向こうから差し込む光を頼りに、
全力で。

あと一步。首元に今までは無かった、帯状の布が掛かり、後ろ向きに転倒する。

だが、手は動く。近くに落ちていた空き瓶を拾い、後にいるであろう男に向かい振るう。

当れ！

しかし、瓶を持っている手は、そのまま空を切り、そのまま床に押し付けられ動かなくなる。そして、上からの圧力……その力で、折れているであろう骨が肺へと刺さった。

口から情けなく、空気が吐き出される。既に、抵抗する力も無く、首が下がる。

「やっぱ、まずは掃除やな。あと食器も汚れとんの多いから」

「バカ。まずアタリかハズレか。それだけ見て、アタリなら利用するだけよ」

あの少女とは別の、やけに高飛車な声が耳に届く。

少し高めの、まだ幼いくらいなのに、その声には、充分すぎる位の意思が籠っている。

「で、結果はどう？」

「ん。もの凄いくらいにハズレ。結構、高位魔術式は覚えてるけど、

それだけ。血中魔力は今のところゼロだし、素質も皆無。魔色も銀に白が少し混じってるだけ」

「どうやら、俺は『ハズレ』らしい。これで、痛い思いもしなくて済むと言う事か。」

手は使えないが、胸をホツと撫で下ろし、声のしたほうに感謝した。

そこには、乱雑に切った紅い髪を肩口で留めている少女。その二つの瞳には、あの獣と同じ、濁った金の色彩を帯びていた。なにか、嫌な予感がする。

もうじき、彼女の口が開き、希望か絶望かの言葉が編まれるだろう。

「その便利な脳だけ貰って、役に立たない容れ物は、収集所にも捨てておきなさい」

編まれた言葉は絶望。身体は、思うように動けない。だが、口だけなら動く。

少しでも、生き延びれば希望の隙間くらいは、出来るかもしれない。

血中魔力。確か、それは生まれたときから決定していて、ない者には無くて、ある者には膨大な量の魔力が通うこととなる。勿論、一般人の俺にはそんな物など皆無。

なら、偽装できる単語を調べろ。

氷の心臓。それは外見上では判断できない。だが、凍りついた魔力炉が溶け出す事により、持ち主の魔力は大きく跳ね上がる。それは、人間の限界でさえ突破できる。

まだ足りない。もっと、大きな確定要素を。偽装出来るだけの要素を。

異獣と人間との混血。それは存在する筈の無い、だが存在してしまった、忌諱すべき存在。魔力炉が空の者もいれば、馬鹿げた容量を持つ者もいる。

それは、誤魔化そうにも誤魔化せない違いがある。だが、それで

良い。これは、嘘ではないのだから。確かに、自分は虐げられた存在だった。その上、対抗すべき道具が無く、体力も逃げる事も出来ないくらいに弱い『混血』だった。だが、間違いでは無い。

思い浮かべた台詞。それは、ただの強がり、唯一の生きる術。

そして、自分の得意分野。首に手を掛けられた瞬間、口元を吊り上げ、挑発するように台詞を詠む。

「おいおい。アンタ等、視力が悪いんじゃない？ 俺の血中魔力は、溶け出すんだよ。コレを何て言うか、知ってるよな。そのうえ、俺は混血だ。そこらの異獣なんて、三十匹なら無傷で切り伏せる事が出来るな」

部屋の中が静まり返る。気付けば、自分の首が跳ねて、血を撒き散らしながら床に転がるだろう。気付かなくても、いずれ気付き殺される。寿命が延びるか、縮むか。

ただの二択問題。怒ってない今なら、痛みを伴わずに死ねる。

激昂してしまえば、残忍な方法で激痛を伴い殺される。生きたいから、後者を選んだだけの事。

体全体に掛かっていた圧力から、解放される。まずは生き延びる事に成功した。

「分かった。じゃ、こうしましょう。私たちの内、一人と戦って一撃を入れる事が出来たら、此処で雇ってあげる。勿論、負けたりしたら、結果は分かっているわね？」

背筋が凍る。そして、まだ、生きる事が出来るのだという、安堵感が胸の内に広がった。

一撃なら。いや、此処は何とか上手くやって逃げ出そう。

再び、台詞を考える。自分の身体はボロボロだ。

「今はムリだ。身体が、全快の状態で行きたい。もっとも、全快の状態なら、一撃どころかブツ倒せるだろうけどさ。その方が、見極め易いだろ？」

内心、震えながら。それを表に出さないよう、皮肉を交えた笑みで台詞を吐く。

「それもそやな。そんじゃ、喚術を使ってみてや。血なら、幾らでも出せるやろ」

それは、突然の言葉。確かに喚術は、血の契約さえしていれば、怪我をしていても呼び出せる。それも魔力を使わずに、だ。明らかな失態であり、自分が掘った墓穴だった。

手が震える。偽装して、飾る台詞が見つからない。考えろ、思い出せ、何か思いつけ。

頭の引き出しから、取り出されるのは意味の無い詠唱、文字の羅列だけ。

汗が全身から噴出し、手だけの震えが膝にまで達する。これ以上、長引かせるのは無理。

あと、もう少しで生き延びる事が、出来る筈だった。普通の生活が、帰ってくるはずだったのに、拳を握り口を開く。それは、懺悔の言葉を紡ぐであろう。そうでなければ、ならなかった。

「積もりし銀の雪たちよ」

零れたのは、懺悔ではなく、詠唱。それも、自分が一番気に入っている喚術だった。

何度も何度も口ずさみ、それだけで自己満足し続けてきた詩。まるで、遺書を読むように、成功する筈の無い、初めての契約。今まで試さなかった、試す事のできなかった方法を使う。どんな書物にも書かれていなかった、自分だけのやり方。

頭の中で創造した魔力を編み、陣を組み上げ、一部分を崩し二枚目の陣を組み上げる。

ただ、その繰り返し。土台を創る為、必要の無い部分を削り、必要な部分を強化していく。それが十二回続き、ようやく次の詠唱に入った。

「銀貨を天秤に 血を皿に」

次は土台に陣を上重ねし、それを再び崩し再構築する。今までと、全く別種の喚術詠唱に自分の頭に負荷が掛かり、頭痛が酷くなっていく。目を閉じていた瞼の裏に、紅が映り広がる。

折れていた骨が軋み、そして、別所に複雑に繋がった。悲鳴にもならない声が漏れる。

陣を重ねるごとに、痛みが増していき、骨が繋がりが砕けていく。そして、五枚目の陣を組んだときに、肺に血が流れ込み、息が出来なくなる。

だが、それも収まり、三節目の詠唱に入る。

「銀骨を祭壇に添えよ 黒き血を土へ還せ」

今度は、骨が完全に繋がった。肺へ流れていた血が止まり、肺に残っていた空気が溶ける。

淡水に浸かっているような感覚が身体を包み、瞼の裏の紅に隙間が出来る。

組み上げたのは、三枚の複雑に絡み合っている式陣。

「銀の銃弾 汲み上げた紅い水」

目に映ったのは、銀色の雪。それは頬を掠め、地面へと付く。

それが泉となり、そこへ三十四の銀の波紋が作られ、消えることなく留まった。

頭の中から、利用出来得るであろう、十四の陣を選び出し、絡ませる。

出来る限り複雑に、出来る限り簡潔に。

「もしこの声が聞こえたなら」

全てを繋ぎ合わせる。脳が溶けるような感覚と、血が固まってくような気持ち悪さに襲われ、両膝を付く。

そして、最後の言葉を高らかに言い放つ。

「来たれ『銀の戦姫』^{ヴァルキリー}」

瞬間、全身の力が抜け、うつ伏せに倒れる。

結果として、彼女は呼び掛けに応える事は無かった。それが意味するのは死。

あの男の足が、力の籠らない右手を踏みつける。

「ハツタリとしては上等やったよ。せやけどな、嘘はあかんよ？」

それは明らかな殺気。いつの間にか男の手には、柄が異様に長く、

刃の部分が大きく平らに広がった刀が握られていた。

そして、息を漏らす隙も無く、その凶器が振り下ろされた。された筈だった。

だが聞こえたのは、自分の身の肉が切れる音ではなく、鉄が射ち合う音。

そして、赤髪の少女に引つ張られて、男の身体が後ろへと飛んだ。
「ソレ。私の獲物ってことで」

赤髪の少女が、離していたはずの距離を一気に詰める。

「白の凶器」

短すぎる詠唱。

だが、それでも彼女の手には、身の丈に達するほどの刀が握られていた。

それが横薙ぎに振られ、頭の上を通り過ぎ、在る筈の無いモノに当り弾ける。

ソレは奇跡と言うべきか。もしかしたら、死ぬ前の夢だったかもしれない。

彼女は身体に似合わぬ、銀の巨塊と間違えるほどの大剣を携えていた。

「く仮の主よ。何を私に与える事が出来る」

それは夢で見ていたのより、ずっと綺麗な姿だった。

下袴だけと言う姿でありながら、清楚な雰囲気を感じている彼女は、クスリと微笑む。

ドアの隙間から銀の光が差込み、顔を照らす。

「そうだな。俺は何の取り得も無くてね、ただ渡せるといったら、脳みそくらいだ」

「それでは困る。それに見合ったモノを私も仮主である、お前に渡さなくてはいけない」

かと言って、魔力も無い、体力も無い、自分には何も渡すものは無い。

「なんなら、そっちで話し付けてから、続きをしましょ。一週間待

つてあげるわ」

赤髪の少女が刀を消し、椅子に座った。唐突な出来事に、店の主人であろう男も呆然として床に座り込んでいる。どうやら、賭けには勝った様だ。

隅の方で棒立ちしている、あの茶髪の女の子を見て、入り口から外へ出た。

外の風景は、有り触れたビル街。だが、この風景は見た事が無く、おそらく自分の町とは別の、それもかなり遠い街である事が分かる。それが判明すると、途端に楽しくなった。もう、うざったい授業もしくなくて良い。

その上、さつきまで死の縁にいたというのに、今は最高位の使い魔を連れている。

生きていることを実感し、アスファルトの道を踏んだ。

「さて、どう戦う？ 仮主」

「戦う？ 馬鹿言うな。逃げて、生き延びる。手札の無いトランプゲームはやらん」

それが自分なりの生き方だった。今まで、大多数から迫られ、そうだったように、今回もそうして平凡な終わり。それで良かった筈だった。

だが、彼女からは軽蔑の意がこめられた視線が向けられ、明らかに失望の表情が浮かんでいた。どうすれば、良いというのだろうか。高位喚術式を作れたのも、偶然だった。

自分には魔力なんて皆無で、あんな化け物にかなう筈も無い。

そんな自分が丸腰で、どう戦えというのだろうか。まさか、胴体に爆弾を巻きつけ、突っ込めというのだろうか。生憎、そんな事をするのはゴメンである。

自分の鞆の中には、一枚の古ぼけたコートと、二十冊のノートしかないのだから。

「なら」

誰も居ない道路に、彼女の凜とした声が響いた。

「どんなに、ひ弱な手札でも、確実に勝てる要素があれば良いのかな？」

「ああ、やってやるさ。そんなのがあれば、幾らでも。な」

軽い気持ちで答える。だが、その言葉で彼女の顔は、花が咲いたように明るくなり、俺が背負っていた鞆から、ノートを一冊抜き取って、一枚ずつ捲っていく。

途中、手を止め頷きながら目を上下させていたが、結局全て読み終えた。

そして、また一冊。もう一冊と読んでいき、四冊目で完全に動きが止まり、真ん中のページを開き、道路脇のベンチに広げ、ある箇所を指を向ける。

それは銀色の魔術式の項目だった。そして、それは一番好きな魔術であるが故に失敗の記憶が色濃く残っている。だから、覚えるだけに留めていた。

逆に言えば、その魔術式なら読まずに数秒で組み上げる事が出来る。

「此处に書いてある魔術の中で、成功した物はある？」

「生憎と銀の魔術は出来ないらしい」

「そんな筈は無い。もう一度やってみる」

そう促され、頭を掻きながらノートに書いてある、初歩的なものを選び、詠唱。

「銀の衣を纏え」

ただの一節。だが、それだけで分かった。これは、絶対に失敗する。

結局、二節目を終えた時点で詠唱を打ち切った。やはり自分には、才能など無かった。

出来るなら、目の前にあるノートをぐしゃぐしゃにして、捨ててしまいたかった。

だが、自分の頭の中には、完全に魔術式が植え付けられ、剥がれなくなっている。

もしかしたら、自分は殺してもらいたかったのかもしれない。この、覚えているのに使えない、もどかしさを消してもらいたかったのかもしれない。

俺は、ノートが行儀よく座っているベンチの上に、腰を下ろした。
「お前は」

彼女が再び口を開いた。

「私を喚ぶときに何をイメージしたのだ？」

「何も……いや」

自分は、あの時は無心だった。だが、たしかに彼女の心に触れたとき、見えていたはずだ。

あの綺麗な光景を、あの澄んでいる心情風景を。

「たしか、銀色の泉」

その言葉を紡いだ瞬間、頭の中にあつた幾つかの陣術式が銀の光を帯び、熱を発する。

ほんの、ごく僅かの術式だった。だが、それが嬉しかった。
横に、同じ格好で座っている、彼女。整った顔に、再び笑みが戻っている。

さつきと同じように詠唱を始める。あの時のように積もっていく雪が、そして溶けて茶色の土が見える。詠唱だけではなく、陣術も織っていく。

簡単では無い。まるで、身が焼けるようだった。だが、それを組み終わった瞬間、傷みと言う枷から、身体が解放された。

「く銀の土>幾らでも血はくれてやる」

目の前には、鬘が綺麗になびく獅子が居た。それは、まだ小さく薄い光しか帯びていない。だが、確かにその眼には銀色の強い意志が宿っていた。

「俺の手札になれ。血の方は保障できないが、肉なら美味しいと思うぞ。なに、死んですぐなら、生きているのと同じようなもんだ」

獅子は唸り、そして消えた。

「まだ、初期の部分特化魔術ではあるが」

彼女の声が遠のいていく、そうか初期か。それでも構わない。自分にも使えた。

その事実が、あれば良い。ベンチに座りながら身体を傾けていった。

瞼が重くなり、閉じていく。ふと、下がっている頭が温かいものに触れたが、気にせず意識を手放した。

暗室の中で見えたのは、寂しげな雪の森ではなく、銀の泉の辺で休む獅子の姿。

彼はこちらを向き、スツと目を細めた。

意識が舞い戻り、瞼を開く、いつの間にか自分の身体は、柔らかい布に包まっていた。

日の匂いがする布団。そして、背中には温かい感触があった。

へ？

最初は、毛布かと思ったのだが、そんな筈は無い。その温もりは、胸の方まで包んでいる。しばらくの間、思考が停止していたが、ようやく状況が掴めた。

まさか、あの服装で？

それ以外に何がある。彼女は、手ぶらだったのだから。

なんで、そんなことをする必要がある

確か図書室にあった本には、使い魔は主を認めたときに、生涯の伴侶となる、だとか。

マジですか。

そんな複雑な感情に包まれている最中。上の方から、陽気な声が聞こえてきた。

「おや、アンタ起きたのかい。だったら、その子にお礼言つときなさいよ」

そこには、エプロン姿の中年の女性が立っていて、両手で料理の乗った盆を運んでいた。

「その子、ずっとアンタの傍で、寝ずに看病してたんだから」

……横で寝息を立てている彼女を見た。やつれた様子こそ無いが、気持ち良いくらいに熟睡している。

心の中で感謝し、ふと気になっていた質問を目の前に居る、親切的な女性にした。

「俺、どのくらい寝てました？」

「そうね。丁度、五日位ね」

「こりゃ、やばい。」

今度ばかりは、本気で逃げたくなった。

「案ずるな。二日あれば、基礎なら叩きこめる」

基礎なら。と言う事は、それ以上は無理と言う事だろう。胸の奥から空気を吐き出し、ベッドに倒れこんだ。

もう、完全に身体が戻っている。これなら、街一つ分なら逃げる事が出来る。

倒す作戦も練る事が……出来る。

今、思ってしまった事を馬鹿だとは思わなかった。上手くやれば、いけるかもしれない。

別に倒してしまえというわけでは無い。一撃を入れれば、良いというだけだ。

なら、やれるはずだ。自分の脳内でシミュレーションしてみる。

基礎だけを使った戦術で、あの化け物を倒す手段を何百通りも考える。

ダメだ。

どうしても、詰みまでいけるのだが、反撃され死が待っている。これ以上の手段は、思い浮かばない。腕を一本、失う覚悟なら……。

無理。

やはり無理だ。どの部位を失っても、最後に逆転して殺される。

死から逃れる方法など、ありはしない。

「死に方を考えているのでは、あるまい？」

生きるだけと言うなら、逃げてしまえば簡単なのだが。

「身体を調べさせてもらったが、お前の血では基礎魔術でも五つだけ精一杯だ」

十五ある内の五つだけ。それは明らかな絶望であり、死刑宣告。だが逆に考えれば、今までゼロだったのに五まで使えるのだ。充分すぎる。

でも、それでも足りない。せめて中級の魔術があれば。

「銀の象徴である、＜衰退＞＜特化＞＜付与＞＜繁栄＞＜記憶＞ちなみに、繁栄の方は高等だから無理。ついでに、衰退なんて雑魚にしか効かない。特化も付与も、そこまで使い勝手の良い物では無いな。ちなみに、特化を使っても、コンクリくらいだ」

彼女は一息で言って、ふっと溜息を付いた。

「コレで勝てたら、私はお前に一生ついてやってもいいぞ？」
そう茶化すように、言って彼女はベッドの上に再び身体を横たえた。

既に諦めた風で、天井に目を泳がせている。

特化と付与。それから衰退。記憶の方は、既に自分も身を持って知っている。

衰退を削って特化に。いや、それでも一瞬しか見は持たない。

いつその事、特化だけにして、一撃に賭けるか。

そんなことをしたら、音の衝撃だけで身が吹き飛ぶだろう。

やはり、すべてを使ってやるしかない。ベッドから身体を上げ、ノートを開く。

そして、いつもの強がり。

「一撃を与えるまでも無いよ」

陰を落とす彼女に向かい、放つ。

「与えるまでも無く、倒して見せるさ……ところで、名前を聞いていない」

彼女の口から、綺麗な短い音色が聞こえる＜アヤメ＞と。

その顔に、再び綺麗な花が咲いていた。

「俺の名は稲見キト。魔力の無い、役に立たない魔術師だ。だが、

五つの力で君に最高の勝利を届ける事を。澄み切った銀の泉を枯らせぬ事を誓おう」

それは約束であり、契約。俺は、意味の無くなったノートを破り去った。

一話 銀の契約（後書き）

いえー。

もう一方を放っぼり出した俺。

いえいえ、ちゃんと執筆続けてますので気になさらず。

二話 目覚め

第二話 銀色の朝

その日の朝は、今まで生きてきた中で、一番静かな朝となるはずだった。アヤメとの間に会話も無く、ほんの少し目を合わす位の、そんな穏やかな時間。

目の前のモーニングを二人で並びながら食べている。鼻を、コーヒーとバターの仄かな甘い香りが擦る。

眠け眼を擦り、目の前に置かれたミルクコーヒーと、バタートーストに手を出そうとして、横から白く細い手に奪われる。そちらに目を向けると、銀の糸のような髪が目映った。

その手には、一枚のトースト。

「おい」

その飄々とした横顔を睨みつける。

朝の沈黙は、些細な事で破られる物だ。姉が言っていた言葉が、今になって良く分かった。

そして、当然の様に焦げたパン粉だけが残る皿を隔てて、無言の睨み合い。

だが、それもすぐに終わりを告げた。

「このトーストは俺のだろうが」

「私は三枚しか食べてない」

「俺は五日間、何も食ってねえんだよ」

今までで一番静かな朝から一転、とても騒がしい朝となった。

「その五日間の看病を誰がしたと思っっている？」

「俺が起きてた時は寝てた。第一、魔力なんて勝手に勝手に沸いてくるもんじゃないのか？」

コーヒーの波紋が広がり

気のせいだろうか、部屋が少し軋ん

だ気がする。

アヤメの手に握られていたトーストは、無残にも粉となり、宙を待っていた。

ああ、勿体無い。

いや、違う。そうじゃなくて、なんかやばい。異獣に襲われた時の恐怖より、こっちのが恐い。寝惚けていた頭が一気に覚醒し始める。まずは逃げ道の確保……。

そこに、逃げ道など有りはしなかった。その代わりに、今にも首を切り落さんとする、修羅の仮面を被り、銀の片刃剣を持った女が門番をしていた。

コレは死ぬ。間違いなく死ぬ。

「仮主よ。まさか、血中魔力枯渴を知らずに、陣や唱を組んでいたのではあるまいな？」

「すいません。わかりません」

来ると思っていた剣は一向に来る気配は無く、殺気もいつの間にか霧散していた。

「よいか？ 元々、血中魔力には限界がある。人によって形は様々だが、私の血中魔力の魔力炉は＜泉＞だが。内容水……つまり魔力の源が尽きれば、枯渴する。＜火＞であつたとしても、燃料が無ければ消えて無くなる。＜氷＞でも徐々に溶けて、遅くはなるが何時か全て溶け切る。それが、小さければ小さいだけ無くなるスピードが速い」

「あーつまり、使い切ったら魔術は出来なくなる。と」

自分では理解したつもりだったのだが、アヤメの肩がガツクリと下がり、溜息が漏れた。

「車のエンジンが壊れたら、銃の弾が無くなったら、どうなる？」

……使い物にならなくなるわな。

ようやく理解できた。魔力炉は無尽蔵じゃなくて、あくまで心臓と直結している条件爆弾付きのビクリ箱。開けるまで量が分からないし、空けた瞬間からカウントダウンが始まり、それと同時に相

応の魔力が流れ始める。そして、少しずつ消耗されていく。

それは、最初から開けられている人間も居れば、カギを使って開けなければいけない人間も居る。どちらかと言えば、俺は後者だろうか。最初から開いていれば、何度も読んでいる途中で魔術が発動していただろう。それにしても、万人が魔力炉を持っているとは知らなかった。

授業では『選ばれた人』しか使えないと教えられ、それに反発するように、簡単な陣術から、高位な喚術に至るまで、全てを覚えた記憶がある。

その知識は未だに頭の中に残ってはいるが。

俺の魔力炉では、一つの魔術でさえ支えきれないと言っなら、それも無駄な知識だろう。

初期の魔術で、魔力を使い切ってしまう程の小ささなら、きつと後ひとつでも陣を組めば、魔力炉に直結している心臓が焼き尽いて、この身体が二度と動かなくなる。

そんな状況で、戦いなど出来るだろうか。魔術を使わず、素手だけで。

無理だな。

それが結論。とりあえず言えるのは、魔力炉が空になる寸前では、どう足掻こうとも勝てないし、一分も立ってはいられないだろう、だが。

何故かは知らないが、魔力は元に戻っている。それは、確信できた。初歩的な魔術で良い。使えるだけのものを使って、そうすれば勝てる。

既に脳内で戦闘シミュレートはしていた。何千パターンかのうち、使えないものを擦り切り、半分まで減らして、それから再び可能である物だけを残し、あとは削り捨てていく。

それを繰り返した上で、残ったのは二つだけだった。内一つは、自分の性に合わないので破棄し、もう一つの方だけが残る。

それは、命を張った賭けでもなければ、血肉を削った勝利でも

ない。ただく逃げゝの勝利。

なにも、正面から拮抗する必要は無い。あわよくば、宣言通りに一撃を入れるまでも無く倒せるかもしれない。どれだけ、捻じ曲がった戦いであれ、それが勝利へと結びついたのなら、それは正回答であるし、誰からも文句は言われない。

敢えて言うなら、これは子供の喧嘩。ただ、どっちも手を明かさないのでから厄介だ。

こちらも罫を張る機会なら幾らでもある。そして向こうは、それ以上の機会を得ている。

こう見ると、圧倒的不利な状況突きつけられては居るが、まだそれほど絶望的なものではない。本当に絶望的な状況に追い込まれると、人間は冷静な判断が出来なくなる。

だから、そうならないように、策を練る。ホンの気休め程度の、ちよつとした悪ガキのいたずら程度の策を作つてしまえば良い。それで充分、戦えるのだから。

手に持っていたコーヒークップを置き、顔に当る湯気を感じながら目を瞑る。

「とりあえず、泥舟でも笹舟でも良いから作るかね」

「笹舟では大砲は乗せれんぞ？」

そう言つて彼女は、銀のルージュが塗られた唇を妖しく歪める。

だが、それで良い。泥舟に大砲を、笹船は揺れるだけ。それだけで、良いのだ。

机から立ち、ベッドへと向かう。

「良いのか？ そんな、のんびりで」

「勝てる方法が見つから無いから、寝て過ごす。きっと何とかなるだろ、さ」

確実に勝てる方法が、その策が出来上がるまでの辛抱。

だが、それまで退屈になるだろう。後から聞こえる制止の声には耳を傾けず、部屋に入る。そして、部屋を中心に立ち、その真下に円を描く。しかし、一本の線ではなく、十本の。それも、かなり複

雑に絡み合った陣の土台。けれど、魔力は通さない。

それが終わると、今度は円の中に紋を入れていく。こちらは、少し初歩的なく集中への陣紋。それを交わらせるように、重ねるように描いていく。丁度、一つ描き終った頃には、赤のインクは枯れてカサカサとした毛先しか残ってはいなかった。

もう、夕暮れ時になったのだろうか。カーテンの隙間から、橙色の光が覗いていた。

足元を一匹の蜘蛛が這い回り、ピタリと止まる。それを片手で摘み上げ、手の甲に乗せた。

「さて、どうしたもんかね？」

さあね。と、蜘蛛が言ったような気がした。

カーテンから月明かりが漏れる。

そのガラス越しに、一本の銀の絹が見えた。ここ五日間、だが実際は半日ほどしか逢っていない、あの大人びた少女。自分が喚んでしまった偶然の産物。

その光景に、目を疑った。

それが、月の光の下で立ち竦んでいた。だが、一人ではなく大勢と。何十人……いや、匹か頭で数えるべきだろうか。あろうことが異獣と、戯れていた。

異獣から殺気は無い、いやむしろ凶暴さの一切が無くなっている上に、ペットの如く懐いている。＜外の町＞とは違う、全く別の異獣。ようやく、この街を少し理解できた気がした。この街は誰も住んでいないし、電気も必要程度にしか通じていない。

つまり、ここは異獣達の楽園。何の争いもせず、のうのうと繁殖が出来るし、天敵である人間は一人も居ない。彼等にとって、これほどの快適な空間は無いだろう。

窓から少し離れ、アヤメを見る。う、ん……なんというか。

「あの子。すっかり、手懐けちゃったわね。ホント、いい女になるわよ。期待しときなさい」

後から、おばさんの声が響く。それも余計な一言が添えられて、だ。

「そりゃ、どうも。でも本人に、言っておやってください」

そこから先、会話が続く事は無かった。

いつの間にか、肩には四本の爪と細い瞳孔でアヤメを見つめるネコワシ>が羽を休めている。本来の、いや刷り込みで教えられた凶暴さは一切無く、まるで人間を止まり木であるかのように、下から睨を睨り、片足で毛繕いをしながら寛ぎ始めた。

なるほど、ネコの動作に良く似ている。と、いつても自分が知っているのは、純粋なネコではなく虎の血が混じった、少し大きめの凶暴なネコだが。

小さい頃は、よく異獣と遊んだ記憶がある。姉と二人で、よくネコワシを追いかけて、巣で眠っているヒナを観察しに行ったものである。結局、巣立つ所が見れなかったのは心残りだった。

確か、あの時も俺は、一步後ろで眺めているだけだったと思う。思いながら、肩に乗っているネコワシの羽毛を撫で上げると、ぶるつと身体を振るわせる動作と共に、温かな熱が伝わってくる。そして、金属音のような声が聞こえ、再びアヤメの方へ飛び降りていった。

これが、異獣の本質なのだろう。人を襲っているのではなく、種を護っている。それは人間も同じ事で、生きるためには仕方の無い連鎖。それを否定する資格は、人間にない。

自分達が、彼らの居場所を奪ったように、彼らは居場所を奪い返そうとしているだけ。

ここの町の人間は、逃げたか食われたか。何れにせよ、現実を受け切れなかった、バカな人間たちは居られなくなったのだろう。このオバサンは、受け入れる事が出来た唯一。

……月の光が、部屋の置くまで届き、涼しい空気を運んでくる。今日は涼夜になりそうだ。

日の光が目には掛かり、ゆつたりと身体が覚醒していく。

昨日の異獣達の宴が嘘の様に、街には再び静けさが戻っていた。

ホントに静かなもんだ。

思つて、今まで眠っていたベッドへ横たわり、この静寂を噛み締めながら目を閉じる。

だが、部屋のドアが開き、桃色のバスタオルに身を包めたアヤメが現われる。白く雪のような肌が赤く火照り、綺麗な細工が施された人形のような……そこまで考えて、寝惚けている頭と身体を叩き起こし、ベッドから飛び起きる。

部屋の入り口で立ち竦んでいるアヤメは、きょとんとしながら此方を見据えていた。

「ちゃんと服を着ろよ！」

ああ、と頷きながら、アヤメは自分の姿を見て、苦笑する。

「昨夜、通り雨にあつてな。今、服を乾かしておる」

「じゃあ、なんか借りてこいって！ ああ、こっち来るな。奥さんトコに行け！」

とは言つたものの、ここに彼女が着れる様な服は、あるだろうか。オバサンも背は低いくらいだし、年齢は三十くらいだから、子供が居ても小さいだろう。

そこまで考え、ふと思いつく。結婚していて、旦那さんが居たのなら……

大きすぎて、だばだばのワイシャツ。緩くて、少し腰から下がったジーパン。

想像して、頬が熱くなる。流石にそれは無いだろ、と頭の中で打ち消し、再び寝る体勢に入るが、先ほどの姿が臉に焼き付き、全く眠れない。彼女が帰って来るのも、時間の問題だろう。流石に男物の服は着てこないだろうと、自分の中で呟き、掛け布団を被る。

それから何分も経たない内に、再びドアが軋みを立て開く。ベッドから身を起こそうとするが、どうしても意識しそうで恐い。

「……？ 寝ておるのか」

そう一人で言つて、ベッドの横に置いてある木椅子に座る。
どうやら、長めのスカートをはいているようで、男物と言ふ事は無いらしい。

欠伸をしながら、なるべく自然な演戯でベッドから起き上がる。

「ん。あ、着がえ」

時間が止まった。

「ああ、なんだ起きたのか仮主よ」

ニツコリと微笑み、此方を向く。必然のように胸元に目が行った。
新品のような、純白の生地。第二ボタンまで外され、絹のような肌が露わになっている。

確かにスカートだけなら、あの人のサイズでも大丈夫だ。少し早とちつたらしい。

「ああ、これか？ 奥さんが貸してくれたんだ。似合う？」

そう言つて、顔を寄せる。

「あー。似合、似合うから、少し離れてくれ」

肩を掴んで突き放し、呼吸を整える。アヤメはボケつとした表情で、此方を見ている。

コイツ、誘つてるのか、全く分かっていないのか……どっちにする厄介だ。

「とりあえず、さ。今日は寝させてくれないか？」

「なに？ もう時間など、あまり無いのに。少しくらい、努力したらどうだ？」

今の彼女の格好には合わないくらいの、その堅苦しい言葉に苦笑する。

「ああ、ほら。俺つて、楽しんで勝つタイプだからな」

あまり痛いのは好きじゃない。そう言つて、布団に潜る。

小さな溜息と、その後聞こえたドアの音に安堵し、目を瞑る。

やはり、大きくなった心音は収まらないが、部屋の中の暖かい空気に包まれながら、眠りに落ちていった。

まるで、身体が宙に投げ出され、落ちていくような感覚だった。いや、案外、本当にそうだったのかもしれない。そして、何秒もせぬ内に、背中に岩のような物が当り、身体が弓の様に曲がり、口から息が吐き出される。

だが、痛みは無く、まるで他人の身体であるかのような感覚。そして、勝手に足が動き前へと走り始め、そして何の予告も無く止まる。完全に、自分の意識だけが、身体の中に入っている状態。筋肉などは動かず、ただ見えて聞こえているだけで、それ以上の感覚が無い。走っているというのも、景色が変わっているから、そう感じているだけだった。

そして、一つの場所へ辿り着く。銀色の月に当り、銀に光る泉と黒光りする森。そして、銀色の獅子。いや、首から尾の部分まではオオカミの様にしなやかな身体をしている。

その獣が、此方に近づいてくる。そして、こちらも手が動き、その獣の首を愛撫した。

温かい……ああ、これは。

そこまで感じ取り、不意にその温かさが抜け、顔に熱湯のような空気が流れ込んできた。

その熱風は、窓の方から流れていた。もう月は上の方まで昇り、静かな闇が広がっている。身体から噴き出ている汗をふき取り、机に置いてある鞆から一枚の古いコートを取り出し、背中に羽織って部屋から出ようと、ドアノブに手を掛ける。

だが、そのドアノブは勝手に回り、隙間から銀の髪が滑り込んできた。

「なんだ。起きてたのか？ では、さっさと行こう」

そう言い、身を翻して部屋の中に入り、窓に手をかける。

「おい。こっから降りる気か？」

「一つ言っておく。男の方は危ない、もう一人の方にしておけ」

人の話を聞け。

抗議をする前に、身体を抱えられ、そのまま足場の無い宙へと投げ出される。

そういえば、夢の中でも、こんなだったなと変な笑いが込みあがってくる。

そして、着地。此方には振動しか伝わってこなかったが、砂が舞っている所からして、かなりの衝撃だったのだろう。

「ほら、向こう様から来て下さった様だぞ。仮主よ」

マジかよ。

そこには、月を背負って伸びた影が三つ。

「前座は、私が引き受けよう」

ふわりと暖かい空気が舞い上がり、銀の絹糸が揺らめき、聞き取れないほどの声で、詠唱が組まれる。そして、もう一つの銀の光が目の前を突き抜けた。

それは、全くの別次元の魔術。そして、弾丸のような銀の槍は、月を背負った影の一つを貫く勢いで加速する。だが、その勢いは、当る直前で掻き消え、再びの静寂が訪れる。

そして、影が揺らめき、白光と共に鋭利な刃物が射出される。その内の一つはアヤメの身体を貫き、地面へと。そして残った物は全て、影の主の手元へと帰っていった。

まさに人外同士の戦い。それは、まだ前座であるというのに、クライマックスに向かっていっているような臨場感。だが、息をする隙をも与えないように、三度目が始まる。

それは、ほぼ同時。月の光に照らされ、銀の髪と赤の髪が混ざるように揺れる。

もし、普通に通りかかったものが見たのなら、踊っているように思えたのかもしれない。だが、双方の手には、一本の凶器が握られている。それは、すでに殺し合いとなっている。

銀と白が合わさる、そのたびに金属音が鳴り響き、粉塵が舞い踊る。

一太刀を浴びせていくことに、お互いの身体に傷が付き、だが互いに引くことは許されない。斬り合っているだけの、ただの死闘が此処に始まった。

二話 目覚め（後書き）

はい短いです先生。

別に今までが長すぎただけなんだけどね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4458a/>

Weak ' Illution

2010年10月11日03時55分発行